

## 古代アメリカ学会 第13回東日本部会研究懇談会のお知らせ

### 若手研究者による研究の紹介①：

#### ベイズ統計解析による<sup>14</sup>C年代の較正と土器編年の精緻化

2021年度の第一回研究懇談会を以下の要領で開催します。ふるってご参加下さい。また非会員の方も参加できますので、関心のお持ちの方にはぜひお声をおかけ下さい。ただし、参加には事前登録が必要ですので、ご注意ください。

#### 〔研究懇談会概要〕

今回の研究懇談会は「若手研究者による研究の紹介① ベイズ統計解析による<sup>14</sup>C年代の較正と土器編年の精緻化」と題し、最近博士論文を提出された若手研究者・金崎由布子会員にその研究成果についてお話しいただきます。新型コロナウイルス感染拡大を考慮し、オンライン開催となりますが、オンラインならではの利点を活かして研究発表と質疑応答・議論をわけて実施いたします。研究発表は事前録画された動画を一週間オンライン配信し(5/22～5/28)、懇談会当日(5/29)は2名のコメンテーターによるコメントと質疑応答、参加者を含めたフリートークのみに充てます。これより、発表内容の理解を深めるとともに、懇談会では従来よりもより深い議論が行われることを意図しております。様々な分野の視点から活発な議論・意見交換をしていただきたく存じます。

なお、参加には事前登録が必要です。**5月25日(火)までに**以下のウェブサイトにて登録をお願いいたします。登録後、動画配信サイトのURLを含む詳細情報をお送りします。

参加登録サイト → <https://forms.gle/1UYPL2cCmfHpFMCi9>

---

### 「土器・ベイズ・時間性：紀元前二千年紀のワヌコ盆地の編年をめぐる一考察」

金崎 由布子 (東京大学)

#### 【概要】

本発表では、紀元前二千年紀のワヌコ盆地の近年の研究成果を題材として、「編年研究の発展は何をもたらすのか」について議論を行いたい。そのために、2020年度に提出した発表者の博士論文の内容を踏まえつつ、①土器編年はどのようにして精緻化可能か、②<sup>14</sup>C年代のベイズ分析はどのような新たな見方につながるか、③編年研究は「時間性」の問題とどう結びつくか、という3つの問いについて考察する。

アンデス山脈東斜面のワヌコ盆地は、山地と熱帯の境界付近の特異な立地に位置している。1960年代に東京大学によるコトシュ遺跡および周辺遺跡の発掘調査が行われ、形成期早期から末期の5時期区分の地域編年が構築された(Izumi and Terada 1972)。その後当地域ではしばらく調査研究が途絶えたが、2016年から東京大学の鶴見英成氏を代表として編

年の精緻化を主目的とした調査が行われた。この調査では、コトシュ遺跡の再発掘およびハンカオ遺跡の新たな発掘が行われた。発表者は 3 年間にわたって行われたこのプロジェクトで、紀元前二千年紀を中心として土器分析を行い、編年を新たに精緻化することに成功した (Kanezaki et al. 2021)。また 2019 年にはワヌコ盆地南部に位置する形成期前期の遺跡であるビチャイコト遺跡の発掘調査を実施した。これらの調査の結果、ワヌコ盆地の前二千年紀の編年は、従来の 2 時期区分 (前期・中期) から、WJ-I~V 期および KT-I~II 期の計 7 時期まで細分された。

上記のプロジェクトでは東京大学総合博物館年代測定室との連携による放射性炭素年代の精緻化が研究の柱の一つであり、戦略的な調査・分析により豊富な  $^{14}\text{C}$  年代データが取得されていた。発表者は細分化された土器編年に妥当な数値年代を与えるため、年代測定室の大森貴之氏と共にベイズ分析による年代解析を実施した。その結果、各時期のモデル年代が得られ、100~150 年の精度で土器の変化の詳細が明らかになった。これにより、「山地・熱帯の伝統の融合」として捉えられてきたワヌコ盆地の初期の土器発達のより複雑なプロセスを捉えることが可能となった。

さらに、新たに構築された高精度編年により、これまで同時期とみなされていた各遺跡の利用の多様性が明らかになった。形成期早期から中期まで継続的に利用されたと考えられてきたコトシュ遺跡では、ハンカオ遺跡にみられる WJ-I 期にあたる時期の利用がなく、その後の時期にも利用の間隙が認められた。またビチャイコト遺跡では、WJ-IV 期にはじめて立地の利用が開始し、比較的短期間で機能が停止していた。

以上が発表者の博論研究の主な成果である。ここまでの内容から明らかなように、本研究では編年の精緻化が研究発展の要であった。土器編年の細分は、土器の分類方法やシーケンスの構築の仕方と密接な関係にあり、新たな方法の導入が地域の編年の精緻化を可能にした。また、詳細な相対編年とベイズ分析を組み合わせることにより、精度確度の高い年代推定が可能になった。さらにこれらの分析から、編年上の各時期の境界年代や持続期間についての実証的な議論にも踏み込むことが出来るようになった。

以上の内容にもとづいて、本発表では冒頭で挙げた各問いに対して発表者なりに回答し、編年研究の可能性について考察してみたい。古典的とも見られる土器の型式学的分析と、ベイズ分析という新しい手法との結びつきは、「基礎研究」として位置付けられている編年研究の可能性をどのように拓きうるのか。本発表が新たな議論の呼び水となれば幸いである。

#### 【引用文献】

Izumi, S. and Terada, K. *Excavations at Kotosh, Peru. 1963 and 1966*. The University of Tokyo Press.

Kanezaki, Y., Omori, T., and Tsurumi, E., Emergence and Development of pottery in the Andean Early Formative Period: New Insights from an Improved Wairajirca Pottery Chronology at the Jancao Site in the Huánuco Region, Peru. *Latin American Antiquity*: 1-16.

● 研究発表

[発表動画の配信] 2021年5月22日(土)～5月28日(金)

※ 動画配信サイトの URL は参加登録後にお知らせいたします。

● 研究懇談会 (オンライン開催)

[日時] 2021年5月29日(土) 13:00～15:00

- ・ 開会あいさつ 13:00～13:10
- ・ コメンテーターによるコメントおよび質疑応答① 13:10～13:40  
    コメンテーター：白石 哲也 (山形大学)
- ・ コメンテーターによるコメントおよび質疑応答② 13:40～14:10  
    コメンテーター：塚本 憲一郎 (カリフォルニア大学リバーサイド校)
- ・ 休憩 14:10～14:20
- ・ フリートーク 14:20～15:00

[主な議題]

- ① 土器編年はどのようにして精緻化可能か
- ②  $^{14}\text{C}$ 年代のベイズ分析はどのような新たな見方につながるか
- ③ 編年研究は「時間性」の問題とどう結びつくか

[参加登録サイト (※参加を希望される方は5月25日(火)までにご登録下さい)]

<https://forms.gle/1UYPL2cCmfHpFMCi9>

[主催]: 古代アメリカ学会

[連絡先]: 東日本部会研究懇談会世話人・松本 剛 ([gocito\\*human.kj.yamagata-u.ac.jp](mailto:gocito*human.kj.yamagata-u.ac.jp))

古代アメリカ学会事務局 ([info\\*americantigua.com](mailto:info*americantigua.com))

(\*を@に変更してご利用ください。)